

プロローグ 遠い都市——シリーズ〈ヨーロッパ・静止した時間〉より

奈良原一高がヨーロッパに向かったのは30歳の夏、1962年の8月でした。

その数年前から、奈良原は新しい感覚の若手写真家として、さまざまな撮影の仕事に追われていました。そこへフランスのモード誌から誘いを受け、これをきっかけに、自分の生き方を見つめ直そうと日本を出たのです。パリを拠点とし、撮ることではなく見ることを目的に3ヶ月ほど過ごす予定でした。その頃日本は、世論を大きく揺るがせた安保闘争が終わり、高度経済成長のもと、2年後のオリンピック開催へと突き進みつつありました。

やがて奈良原は妻の恵子と呼び寄せて車を手に入れ、ふたりでフランス、スイス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、ポルトガルなどを回り始めます。帰国したのは約3年後の1965年5月。長旅の成果として発表されたシリーズのひとつが、〈ヨーロッパ・静止した時間〉です。

奈良原はパリを「老婆」のような町と評し、公園の並木道を行き過ぎる若者や老年のカップルを眺めながら、人は死によって人生を完成させるのだ、との思いに沈みました。またパリに限らず、ヨーロッパ各地の古い都市に残る石造りの塔などが、ある種の残酷な厳しさを見せていることになじめず、その違和感をきっかけにあらためて撮影に向かいました。

重々しく、独特の遠さを感じさせるこの〈ヨーロッパ・静止した時間〉は、1965年11月の『カメラ毎日』などに部分的に掲載された後、1967年には奈良原の初の写真集として発表され、さまざまな賞を受けて話題になりました。そしてこのシリーズと同時に、奈良原はもうひとつのシリーズをまとめていたのです。それが次章から紹介する〈スペイン 偉大なる午後〉です。

第1章 祭り——シリーズ〈スペイン 偉大なる午後〉より「フィエスタ」

奈良原は1963年と64年の夏、そして65年の春をスペインで過ごします。5ヶ月にわたるその経験は、65年10月、帰国後初の個展「スペイン 偉大なる午後」に、また69年には写真集としてまとまります。

「約束の旅」という長いエッセイ集を別冊で付けるという、熱の入れようでした。この写真集は「偉大なる午後」、「フィエスタ」、「バヤ・コン・ディオス」というパートの順に進みますが、奈良原がスペインに見出したものをより身近に理解するために、この展覧会では「フィエスタ」から紹介します。

「フィエスタ」は、北部パンプローナの牛追い祭りとして知られるサン・フェルミン祭から始まります。世界中から若者が集まる、ときいて興味を引かれ、足を運んだ奈良原は、その若者たちの「爆発する喜び」と、誰もが分け隔てなく祭りに参加できることに感動します。

「そこには国境もなかった。およそ自分と他人とを隔てる何物も存在しなかった。ただ、首に赤いスカーフを巻けばそれでよかった」。日本では常によそ者の感覚で生きてきたとの思いが、この感動の裏にはあったようです。

パンプローナのあとは、南部アンダルシア、セビーリャの春祭りとマラガの夏の祭りの写真が続きます。奈良原は、観光客向けにフラメンコを見せるタブラオ（ライブハウス）よりも、路上で歌い踊る若者たち

に心惹かれ、見つめています。

「夜空が白み始める頃、踊り明かした彼等は名残惜しそうに立ち去ってゆく。街角のひとつひとつに立ち止まっては、ひと踊り、そしてまたひと踊りと、今は果てた祭りの夜明けをいとおしみながら舞台から遠のいてゆくのだ」。粋で現代的な若者たちが文化を体現していることに、奈良原は深い共感を寄せたのです。

第2章 町から村へ——シリーズ〈スペイン 偉大なる午後〉より「バヤ・コン・ディオス」

「バヤ・コン・ディオス」とは、スペイン語で「さようなら」を意味する古い言い回しです。直訳すれば「神とともにお行きなさい」となるこの奥ゆかしいあいさつの言葉を送られながら、北はアルタミラの洞窟から南はアンダルシアの路地裏まで、奈良原はスペイン各地を巡りました。

自分の車で旅をした奈良原は、ときには大都市を選ばずに、観光客のほとんどいない町や村を訪れることもありました。暗い表情の子ども、闘牛場の若い憲兵たち、あるいは茶目っ気たっぷりの老人など、奈良原は人々の多様な姿をとらえています。撮影中、もっと良いところを撮るようと、憲兵に注意されたこともあるようです。当時のスペイン政府は、自国の美しいイメージづくりに大きな注意を払っていたのです。

悲惨な内戦のうえに樹立したフランコ政権のスペインは、長く国際社会から締め出され、また政権の方針もあって自給自足体制をとっていました。しかし国内外の情勢は変化し、奈良原が旅した1960年代前半のスペインは、経済の自由化などが進んで、日本に次ぐ驚異的な高度経済成長期を迎えています。

特に観光産業は重要でした。主に南部アンダルシアのエキゾチックな風物に、新設のモダンな高級ホテルなどを組み合わせてアピールしたことで、太陽と闘牛とフラメンコと快適さを求める、アメリカや他のヨーロッパ諸国の観光客が激増していたのです。日本人がたくさんやってくるのは、このしばらく後です。

「かつてひとつの極で停まった歴史の振り子が、今日、もうひとつの極に向かって正に動き出そうとしている」。奈良原は変わりゆくスペインの姿を目の端でとらえながら、そう簡単には変わらない何かを、目をこらして人々の佇まいのなかに探していたようでもあります。

第3章 闘牛——シリーズ〈スペイン 偉大なる午後〉より「偉大なる午後」

「偉大なる午後」とは、闘牛の際に演奏されるパソ・ドブレという形式の有名な曲です。奈良原は1963年のサン・フェルミン祭で初めて闘牛を観戦して以来、各地の闘牛興行を追うように旅を続け、200頭もの闘牛を見ています。これは尋常ではない数です。

まるで舞うように闘牛士と牛が接近するとき、奈良原は「一瞬の真空」を感じ、「生と死の交わりを成就する」場が現れると見ています。20代の頃、極限状況での人間の生を見つめる写真家として出発し、30代になって自らを問い直す旅路にあった奈良原にとって、この「生と死の交わり」を見せる闘牛ほど心揺さぶられるテーマはなかったのでしょうか。しかも当時、スペインの闘牛は、時代に翻弄されながらも黄金期を迎えていたのです。

闘牛は、その町や村の聖人の祭りに合わせて行われてきたローカルな催しです。しかし国外の観光客が

客席の半分を占め、テレビという新しいメディアも登場したこの時期、大きな変化が始まっていました。ストイックな佇まいの闘牛士がまだ活躍する一方、ロックスターのようなカリスマ性をもつ型破りの新人がデビューし、それまでにない熱狂が生まれていました。

「今日、死と生とが鮮明に抱き合う地点はスペインの闘牛場の砂の上にはしか残されていない。むしろそのような人間の原点に位するような醒めた熱狂が今日残されていることの方が神秘的なのである」。ひたすらシャッターを切りながら、いずれ闘牛は地上から消えるだろうと奈良原は予感していました。それから半世紀を経たいま、スペインの闘牛はさまざまに議論されながらも、文化スポーツ省の監督下で興行が続けられています。

〈スペイン 偉大なる午後〉は、イマジネーション豊かな写真家が自らのアイデンティティを模索する過程と、スペインの社会・文化の過渡期が交わることで生まれた、稀有な輝きをもつシリーズといえるでしょう。

特集 奈良原一高と勝井三雄

——『スペイン 偉大なる午後』と60年代のコラボレーション

『スペイン 偉大なる午後』をデザインした勝井三雄（1931-2019）は、戦後日本を代表するグラフィックデザイナーであり、奈良原一高の親友でもありました。ここでは、1960年代におけるふたりの活発なコラボレーションを紹介します。

奈良原の初写真集『ヨーロッパ・静止した時間』は杉浦康平のデザインですが、表紙などの仕上げは勝井の仕事です。『スペイン 偉大なる午後』では、モンタージュやスローモーションなど、映画の表現方法を盛り込むため、勝井は観音開きのページを多用することを提案しています。個々の写真のレイアウトは、奈良原がこだわり抜いて決めました。力強いデザインの外函にある重ね刷りのイメージは、勝井が印刷会社のグラビア印刷機をまる一日借りて行った実験から生まれました。外函や見返しの色には、奈良原がスペインから持ち帰った闘牛士のマント（カポータ）の鮮やかさが活かされています。

1960年代後半、ふたりは企業の印刷物や女性雑誌の表紙などでも協働しました。富士紡績のカレンダーには、気鋭の服飾デザイナー・森英恵も参加しています。奈良原は1959年から始めたファッション写真の仕事で森と意気投合し、『婦人画報』などで新鮮なイメージを発表していました。これらのカレンダーは、奈良原・森・勝井という、時代の先端をゆく美意識の持ち主が結集し、ときには齟齬や高松次郎らの現代美術も取り入れて制作された、意欲的なものでした。『婦人公論』の表紙も、奈良原のファッション写真と勝井のレイアウトの冒険といえるでしょう。

アサヒペンタックスカレンダー「Fotofutura」には、奈良原が滞欧中に撮影した風景やファッションモデル、また当時取り組んでいた日本文化というテーマに連なる富士山の写真が見られます。ファッション・広告写真で発揮された奈良原のセンスの良さが、勝井の明快なディレクションによっていっそう際立っています。